



社会変動論序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 中江, 好男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001785

社会変動論序説

中 江 好 男

北海道教育大学旭川分校社会学研究室

Yoshio NAKAE : An Introduction to the Social Change (No. 1)

目 次

I 社会学と社会変動論	III 体制変動論
1. 社会学の動向と社会変動論	1. 基本的視角
2. 社会変動論の今日的課題	2. 社会体制——その構造と発展——
II 社会変動論の諸類型と問題	3. 産業資本主義
1. A・コントの場合	4. 独占資本主義
2. 高田保馬の場合	IV 結 語
3. A・インケルスの場合	

I 社会学と社会変動論

1. 社会学の動向と社会変動論

社会学は19世紀中葉によりやく一個の独立科学として成立した。それは近代ブルジョアジーが封建勢力をうちやぶり、市民社会＝資本主義の体制が旧体制にとってかわろうとした時代であった。ところでブルジョア的支配の確立の過程は、同時にその内部矛盾の激化過程、市民社会の悲惨面の顕現の過程でもあったのである。フランスではまだ大工業は知られていなかったが、大革命のあと、その成果を独占したブルジョアジーは、人民の下からの攻撃にたいしては絶えず旧勢力と妥協し、第一帝政とそれに続く王政復古期の政治反動のなかでは、人民は抑圧され労働者は飢餓に瀕していた。「理知の王国」は崩壊したのである。こうしてブルジョアの秩序をバラ色に描く幻想はうちやぶられ、市民社会への懐疑・批判が生じてくることになる。すなわちそれは、一方では失われた過去への追憶につらなるところの復古思想の抬頭として、他方ではブルジョア的支配の否定と克服によって新しい未来を創造せんとする社会主義の生成としてあらわれたのである。このようななかで空想社会主義者サン・シモンを分岐点として、その哲学的原理＝機械的唯物論は一方はその唯物論の発展——マルクス主義の弁証法的唯物論へ、他方はオーギュスト・コントの実証主義へと向った。それらはいずれも全体社会をその根底から把握しようとする社会諸科学の統一的体系であった。「社会学」はこうして封建的イデオロギーと闘いながら、同時に社会主義に対決する実践的科学として成立したのである。こうして成立した社会学がその後の歴史において社会変動をどのようにとらえているのかを概観してみたい。

まず初期総合社会学を代表するA・コント、H・スペンサーについてみると、前述した社会学

成立の事情から、社会学を構成する社会静学と社会動学のうち後者にその重点がおかれていた。コントにおいてはそれは社会進歩の理論として、スペンサーにおいては社会進化の理論として展開された。コントについてはのちに詳しく検討するが、その進歩の理論は知的進歩の3状態に対応する社会組織の三状態が軍事的、法制的、産業的という順に進歩するという。社会は家族を単位とする全体であり、労働の協働感情をその統一原理とする分業の全体である。そしてその有機体は、個人よりも全体に重きをおく。イギリスでは資本主義社会を典型的に発展させ、相対的安定状態が続いた。しかし1840年代からしだいに階級対立がはげしくなり、資本家の危機意識は高まってきた。そうしたなかでも最も徹底した産業資本のイデオログとしてのスペンサーが社会学を体系化するのである。その社会学は社会有機体論と社会進化論によって特徴づけられるもので、社会はコントと同様、社会静学と社会動学に分けられる。個人的有機体から構成される「優級有機体」としての社会有機体は、その発達のなかでそれがもつ諸機能を分化させ、その構成単位は相互の依存性を増大させる。そしてこの分化と相互依存性のうちには共存競争が働き、それら相互の均衡・調和がもたらされ、こうして社会進化がなされるという。経済の自由放任主義に適用されるこの生存競争は、資本蓄積の正当化の役割を果すのである。ここでは社会は有機体から類推されているが、のちにみる「社会の構造・機能分析」の原版があるといえる。こうしてスペンサーにあっては社会は軍事型から個人の生命・自由・財産の権利が保障されるはずの産業型へと進化することになる。

さて資本主義が自由競争の段階から独占の段階に移る1870年代以後、そして特にその完成する20世紀初頭以後には、少数の金利生活者の国家は、その矛盾の爆発阻止のため植民地超過搾取の「おこぼれ」を労働者階級一部に与え、「民主化」を行なわざるをえなくなる。こうして新たに生じてくるのが自然主義的社会理論や心理学主義、そして形式社会学であった。自然主義的社会理論は心理学的・生物学的社会学においては、社会ダーウィニズムの立場がとられる。社会の法則は社会領域における自然法則としてとらえられ、社会ダーウィニズムのもとに、スペンサーの個人間の生存競争は帝国主義への移行とともに、他民族抑圧の人種闘争に変わるのである。心理学的社会学にしても形式社会学にしても、社会有機体説に対するものとしてうち出されてくる。社会学はそこでは心的関係(G・タルド)、心的相互作用(G・ジンメル)、同類意識(F・ギディングス)、結合(高田保馬)というようなところにその対象を求めることになる。それは旧綜合社会学における帝王科学としての社会学に対する特殊の対象領域をもつ一平民科学としての社会学の立場であるが、それは同時に「民主化」のなかで現実から離れたところにその対象を求めるブルジョアジーの自由主義的立場・個人主義的立場であった。そこでは当然社会の具体的変化は問題にされないものであり、せいぜい結合形式の変化、相互作用の変化等が抽象的にのべられるにすぎない。

第1次大戦により「帝国主義の鎖のもっとも弱い環」としてのロシアの革命以後、資本主義世界体制はその全般的危機の段階に入るわけだが、こうして心理学的社会学・形式社会学は、文化社会学・歴史社会学にとってかわられ、文化的危機の克服のために具体的文化・社会形象を問題とするようになる。E・デュルケームは、個人の意識の外部に存在する社会的事実を物として考察する必要があるとし、心理学主義がそれを諸個人に還元しているとして反対する。社会的事実とは個人の外から個人に対して強制してくるような行為、思惟、感得の様式であり、それは作為様式(行為、感得、思惟)と存在様式(人口分布、交通路数、性質)に区分される。デュルケームにあっては、社会の発展は人口の動的密度を究極要因とする各器官の専門化、個別化であり、そ

これは環節社会から組織社会へ、機械的連帯から有機的連帯への動きとされる。これは典型的な人口史観といえよう。ドイツ文化社会学としてはM・ウェバーがこの第1次大戦後の要請に答えることになった。西南歴史学派・H・リッケルトの方法論をとり入れ、社会学を因果的法則認識ではなく、個別的現象の個別的原因帰属、歴史的個性の認識に求める。更にそれは無限に多様な社会現象の客観性、法則性へ、つまり理念型へと展開される。社会の歴史的発展はそこでは問題とならず、個別の社会現象が抽象された理念型への因果帰属が問題とされる。アメリカにおいてはドイツの精神的観念的文化とはちがひ、文化は人間行動様式の成果の全面にわたるものとしてとらえられる。ここでも初期アメリカ社会学の心理学的な非歴史性にたいする批判を通して形成される。W・オグバーンによれば発明・発見は累積的性格をもつ物質文化としての自然科学や技術の領域での不断の革新を引きおこす。ところで過去の遺産を否定しつつ変化する非物質文化としての政治、経済、法律、社会の諸制度や思想、文化領域は、物質文化の変動に遅れることになり、「文化遅滞」の現象がみられる。また物質文化の変動に適用的な経済制度の比較的急テンポの変動に対し、非適応的な非物質文化としての他の領域はその変動が遅れる。こうして社会の変動は文化の各領域で、その早さも仕事も異なったものになる。社会変動の原因は文化（発明による技術）に求められ、社会の全体的変動が問題とされるわけであるが、それは方向、目的をもたない変化とされる。近年アメリカでは、構造・機能的分析方法が注目をあびてきており、T・パーソンズ、R・マートン、M・レヴィ等がその代表である。この機能主義は、全体社会を社会の諸部分の相互依存によって構成される体系とし、それらの諸部分が全体社会の存続、維持のための機能を果たすというのである。スペンサーの場合、生物有機体との類比によるものであった構造・機能的方法は、V・パレートの社会体系、B・マリノウスキー等の文化人類学機能学派を経てパーソンズにいたるわけである。そこでは反復的人間関係（制度）を構造とし、その構造を維持する可変的要素を機能とする均衡理論へとその装いを変える。体系自体の発展変動としては、「現在の知識状態では不可能」として問題にされない。均衡を攪乱する逸脱行動も、社会化、社会統制の機能のもとに結局は均衡を保つことになる。それは20世紀初頭、ジンメル等の社会学的機能主義の過程としての機能ではなく、結果としての機能であり、全体社会の構造の秩序・安定に結びつけるところから、むしろ性格的にはスペンサー等の社会有機体論にきわめて接近したものとなっているといわれる。今日では、この構造機能分析の均衡論に対する批判が、R・ダーレンドルフやマートン等々から出され、闘争あるいは逆機能、変動の積極的位置づけが問題とされている。しかしそれらについても問題はつきていない。

さて以上、ごく粗雑にはあるが「社会学」の歴史のなかでの社会変動論の変化をみてきた。まず問題になることは、これまでの社会学が社会の概念を様々に変えてきていること、社会についての統一された概念をつくりあげることができないでいることである。つまりそのことは、社会に対する主観的・観念的概念化によるものといえる。生物有機体との類比により、またはその発展として考えだされた社会有機体・心理的な人間相互の結合としての社会・制度体系としての社会等々である。またそのことから生じてくることなのであるが、社会の構造と変動の相互の関係が不明確であるということ、それらがまったく別個に問題にされたり、構造論のない変動論であったり、変動が何か偶然事であるかのごとく扱われたりする。しかもその変動の意味があいまいである。コントの進歩・スペンサーの進化・オグバーンの無方向の変化等々で、その変動を量から質へという、対立物の統一としての矛盾の発展として把握することができない。そして更に、これらの様々の色相にもかかわらず、このコント以来の社会学に共通していること、それは資本

主義社会の根本矛盾に目をつぶること、したがって資本主義社会を結局バラ色に描き、無限に続く体制のような幻想をいだかせることである。この社会学—社会変動論に共通していることは、階級矛盾についてはふれないこと、ふれたとしても階級自身変質してきていること等を必ず解説することである。社会という言葉のもとに客観的な実在としての社会が否定されているこの大前提のもとでは、階級という言葉のもとに階級を否定し、変動という言葉のもとに変動を否定することは不可避のものなのである。こうしてわれわれにとっての問題は、それらが現実社会のいかなる基盤にもとづくものであるかを具体的に分析・批判することである。

今日、社会変動論は「近代化論」、「福祉国家論」あるいは「産業社会論」と結合し、今日の有機的段階にある資本主義をかばい、美化し、いっそうの反共性をつよめている。従来のマルクス主義は社会学をブルジョワ科学として外から批判していたが、近年、史的唯物論にたった社会学の積極的展開がなされるようになってきている。それはスターリン批判後のソビエトの動向と無関係ではないと思われる。「ソビエト社会学」(オシーポフ編・田中清助訳)では社会学の一般問題・階級問題、労働問題など広範囲に及んで扱われている。しかし社会学とマルクス主義社会科学とのちがいが、つまりその対象領域について、またマルクス主義の修正、あるいは統一戦線の問題として、なお複雑な問題を含んでいるといえる。そのような問題を含みつつも、今後、社会学内部でのこのイデオロギー闘争はいっそうはげしいものとなると思われる。その意味でも今日、社会学において史的唯物論の立場からの社会発展の具体的提起は、その必要性をいっそう増しているといわなければならない。

2. 社会変動論の今日的課題

日本資本主義はその発生以来、特殊歴史的諸条件のなかで労働者、農民の例外的な劣悪状態を維持しつつそれに支えられて発展してきた。敗戦後の日本資本主義はその急速な発展により、1961年の生産水準は戦前最高水準にあった1934～1936年に比べ5倍半にも達し、また国民経済のなかでの資本主義的経済制度のしめる比重が圧倒的になり、有機的構成の高い部門(鉄鋼・電力・機械化学等)を中心とする産業構成の高度化・編成がえが決定的に進んでいるという点で、量質的な重大な変化が起っている。それと同時に戦前に比べ社会的な生活様式の高度化をまねき労働者の生活費用を高めることになったが、このような生活様式の普及とその社会的強制は、実質的には戦前型の賃金水準・生活水準を強制し維持することになっており、また他方における山ほどの貧困・公害等による生命の脅威を生み出している。¹⁾ 独占資本はそのありあまる蓄積を「むだの消費」にまわすことによってその体制の維持安定をはかり、内外の激烈な競争にまけじと諸々の機関・組織を通してありとあらゆる手段を使っての大量の自己宣伝を行なっている。こうして流される幻想は、ある程度では国民に対し、社会の動向への盲目と片隅の幸福なるぬるま湯に浸らせることに成功している。現状維持を固執するわずかの人は、ねむらせては水をかぶせ、しゃぶらせては鞭打つ行為を無意識のうちに、あるいは意識的に行なっている。しかし「福祉国家」のムードは、なによりもその敵しい現実生活のなかで国民自身に検討されるのであり、水をかぶせられ、鞭打たれるその時に、「ねむり」と「しゃぶり」がまさにムードであることを国民自らが悟っていく結果をもたらしている。しかし「人間は、あらゆる道徳的、宗教的、政治的、社会的な常套句や宣伝や約束の背後に、あれこれの階級の利害を見つけだすことをまなばないうちには、つねに政治における欺瞞と自己欺瞞とのおろかしい犠牲であったし、将来もまたつねにそう」²⁾なのである。そのムードを現実、現実をその変革に導く「社会変動に」についての正しい理解が、そしてそれによる大衆の組織化が今日重大な問題となっているといえる。社会変動論は

こうした現実社会の課題から離れたところに 自からの課題をもっているわけではないであろう。またそのことは、第 1 節でみた社会変動論の問題点と別のことではないと思う。社会変動論の課題は、したがってまず、そもそも社会とは何か、人間社会をどう具体的に概念化するのか、社会変動の原因契機を社会そのもののなかに見出し、社会そのものの構造をその変動と不可分のものとして統一的に把握し、しかも変動を発展として弁証法的にとらえること、こうして社会変動の客観的法則性を明らかにし、そして現実社会の発展に向けて実践的に点検し、確認し、更に社会の発展のなかでその法則性をよりいっそう精密に、科学的に発展させ現実社会へと反映させることである。

私はこれらの社会変動論の課題は、唯一の科学的な歴史観としての唯物史観によってはじめてその解決が可能になると考える。本稿の課題は、したがって上述の課題を史的唯物論の立場からどう解決することが出来るかということ、またその史的唯物論によって、今日いっそう矛盾を深めている資本主義社会をどう歴史的に位置づけ、全体社会発展のための実践的な組織化、方法を与えていくことができるかということである。そこでは全体社会を統一的・構造的にとらえ、その変動を体制構造のそれとして巨視的にとらえていくことが必要となる。

- 1) 「経済」（新日本出版）No. 42, p 23~138
- 2) 「マルクス・エンゲルス、マルクス主義」国民文庫 p 109

II 社会変動論の諸類型と問題

1. A・コントの場合

オーギュスト・コント（Auguste Comte, 1798~1857）は、様々の異説はあっても、一般的にはフランス社会学の創始者。「社会学」の父として位置づけうる。したがってコントを知ること、彼が歴史的社会的にどのような課題をになっていたかを知ること、いわゆる社会学の成立、起源と彼の何らかの影響のもとにその後「発展」し、今日はなばなく流行している社会学の性格を知るためにもぜひとも必要であろう。もちろんコントを知ればすべてが理解できるというものではない。私はコントの社会変動論をその時代との関係如何の視点からみていきたい。

1820年、彼は「社会再組織に必要な科学的工作方案」を出している。そのなかで「この混乱せる状態、日増しに社会を侵す無政府状態を終止させるべき唯一の方法………は文明国民に批判的な方向を離れて組織的方向を執らせ………彼らの全努力、危機の最後の目的であり、再組織準備にすぎない新社会組織の形成の方に導くことである。」¹⁾とのべている。彼によれば、当時国王派は神学的精神の復興により秩序を保とうとし、人民派は形而上学的精神によって進歩をはかろうとしていた。ところで人間の知識は神学的、形而上学的、実証的段階をへて進化するのであり、したがって国王派の勝利は一時的なものであるし、人民派の考え方も古い。そこでその進歩と秩序の完全な統合・実証的精神が時代の要求としてうち出されてくる。この方法にもとづいて産業家のための社会が形成されねばならない、というのである。1789年の革命により第三身分の社会的地位が認められたとはいえ、その後の産業の発達には彼ら自身の新たな矛盾をしいに激化させた。大革命の勝利したブルジョアジーは、勝利の盃を交わす間もなく、ただちに新しい勢力、のちのプロレタリアートに鋒先を向けなければならなかった。彼の師サン・シモン（Saint Simon, 1760~1825）の頃は資本主義社会の階級矛盾はそれほど明確ではなかった。しかしコントの時代にはそれが明確なものとなってきたのである。ブルジョアジーはそこでの危機感・動揺・無秩序を目のあたりにして孤立した個人間の契約により社会が成立するという自然法の考え方は当然否定

せざるを得なかった。そこでそれとは逆に、自然発生的に有機的に結合した「全体」という考え方がうち出されることになる。「社会組織はすべての個々の力を共通の活動目的に導くことを目的とする。なぜなら全体的な結合された作用が働いているところのみ社会は存在するから。」²⁾ 1822年のコントにとっては、その階級対立の激化、社会の混乱とブルジョアジーの危機意識のなかで、ブルジョアジーの立場からいかに産業家の社会を全体として組織するかが問題だったのである。「精神的無政府は、世俗的無政府に先行し、これを生んだ。」「第1系列（精神的な無政府状態の再組織—引用者—）は学者の手中に入り、世俗的権力は実業家の手中に陥るであろう。」³⁾ こうして彼は社会の混乱は、学者の仕事である社会学の実証化がまだなされていないからであるとし、このおくれた社会学を実証主義に基づいて再建し、その上にたつて社会の秩序を回復しようとしていた。1830年の7月革命は産業革命の急速な発展のなかでブルジョアジーを決定的に権力の座につかせた。そこには同じことの別の側面、労働者や農民の悲惨な生活、それ故の暴動・蜂起がともなっていたことはいうまでもない。ところでコントは1829年12月に、実証哲学の講義を始め、その後12年間の長期にわたってひたすら「実証哲学講義」全6巻を仕上げた。社会学はその実証哲学の一部分であるが、同時にその主要な部分でもあった。その間コントがひたすら実証的段階にある自分の頭をふりしぼり考え出したものは何であったのだろうか。「実証精神論」のなかで彼自身がいつているように、「人はたとえ意志しなくてもその世紀を免れない。文明の推移に最も強く抗すると自負するものでも無意識のうちにこの推移の抗し難い影響をこうむり、自身この推移に援助し協力している。」いまやコント自身が無意識のうちにその抗し難いどのような影響をこうむっていたか、いかなる推移に援助し協力していたかは明らかであろう。当時すでに不可避の現実的存在として扉をたたいていた重要な社会の構成要素を無視することにより形成された彼の全体系は、近代市民社会の分散の多元的な無政府状態に対する分析には歴史主義をとり入れ、新たにその状態を全体として秩序づける理論としては均衡的發展、つまり予定調和の考え方を前提とする社会有機体説をとり入れ、そして本質を問わない、人間知識の最高段階にあるという実証主義的方法をもってなされるのである。晩年1848年にはすでにその新階級プロレタリアートはブルジョアジーの肩をたたいていた。

コントの社会学は経験的であり、かつ全体的な、社会を総合的に認識する科学として構成される。そして社会学の課題は「政治的事実を讚美も呪詛もしないで総ての他の科学と同様に、単なる観察事柄としてこれを見る。社会学は各々の現象を内在の諸現象との調和如何の観点において、又、社会發展の前状態と後状態との連鎖如何においてこれを考察する」⁴⁾ ということである。更に彼は社会的諸現象の研究にあたってその「静的状態」と「動的状態」とを別々に考察する必要があるとし、この社会学を、その秩序・共存の法則を決定する社会静態学と、進歩・継続の法則を研究する社会動態学に区分する。この社会動態学において社会変動は次のように考えられている。歴史を支配するものは知識であり、社会の進歩は知識の發展段階によって規定される。知識の發展は三つの段階を経る。初めに物神崇拜、多神教、一神教の三段階からなり、後の段階ほど人間の知識は抽象的の思惟に近づくが、まだ想像が観察を完全に支配している神学的段階。次に一般的性格の不明瞭な折衷的・過度的性格をもつ形而上学的段階。最後にすべての個々の理論的観念・一般的観念が実証的になろうとし、観察が想像を支配する実証的段階である。（三段階の法則）。このような知識の發展段階に相応して社会関係がそれぞれ軍事的段階、法律的段階、産業的段階と發展するというのである。

さて、コントの社会変動論を更に具体的に検討していくことにする。まず人間の知識の進歩が

社会の進歩を規定するといふところから明らかなように、それは観念論的歴史観である。それは 17・8 世紀に歴史の舞台にあらわれてきた「第三身分」のイデオロギーを代表し、崩れ去ろうとしている封建制度と教会の教義にたいする闘争をおこなった啓蒙思想家から形式的に受け継いだものである。啓蒙思想はスコラ哲学に理性認識を批判的に対置させ、啓蒙によって、理性による現存社会関係の批判のみによって、新たな社会制度をきずきあげようとしたのであった。コントはこのフランス啓蒙思想家・「人間精神の進歩史」（1794年）の著者・アントワヌ・コンドルセ（Antoine Condorcet）からその「急進性」を骨抜きにして歴史の発展法則を受け継いだのである。しかし人間の知識・精神はそれ自体、人間の意識から独立して存在し、感覚において与えられ、確認される客観的存在の、つまり物質の反映である。われわれは社会諸現象を知識の発展に求めるのではなく、むしろその知識がいかなる客観的存在を反映するものであるかの観点からみていく必要がある、現実の社会関係・精神の発展をも支えている物質的生活方法の発展から説明すべきであろう。

次に社会静態学と社会動態学の分離の問題がある。これは社会静態学と社会動学、社会構造と社会変動の分離として、今日の社会学に強く影響しているものである。コントにおいては社会静態学は社会の秩序・共存の法則を研究するのであるが、それは個人においては人間の行動を支配するものとして、個人の「必要」、「感情の優劣さ」と社会的愛情がとかれる。家族については、それを社会の単位とみなし、社会学が近世結婚制の未来の変化を検討することはまだできないにしても、「おおよそ今保障し得ることは、想像し得るべき是等の変化がいかに甚深であっても、その変化はやはりこの制度の精神に適合するということだけだ。その精神とは、即ち女は男に服従するということ」⁵⁾であるという。社会学的に考察するなら婦人の身体組織の根本的低劣さ（つまり頭脳の主要な属性としての思考作用の婦人の劣等性）と婦人の社会的視点（つまり同情心・社会性）におけるいくらかの優越性が確認される。社会の単位としての家族がこのような男女の本来的あり方に従った職能・諸関係による安定状態を保つことによって社会の秩序が保たれる。家族結合は、同情的な本能を総合的に満足するようにできているという。社会については、その共働と分業との調和は同情を結合点とする家族とちがひ、その共働感情を結合点とする。それは仕事の分割が服従関係をますます樹立し、自分達を支配・統合する政府を生起させる、そしてこの傾向は個人的性質において、ある者は命令の方に、ある者は服従の方に、各々特殊な気質をもった体系に調和するという。以上が社会の静的考察、静態学の理論であるが、それは社会有機体論による、家を社会的単位とする社会秩序の説明である。ここでその静態学の内容は別にしても、これでは社会静態学と社会動態学のちがひは、一方は社会を秩序あるものとして、他方は同じ社会を変化発展するものとして別々にとらえたにすぎず、社会の「静的状態」と「動的状態」の相互の内的関連性はなんら明らかにされない。社会の静的状態は社会の構造として、動的状態はその社会構造の内的必然性において顕現される対立・矛盾・その結果である発展として考えられる必要がある。コントにおいては、市民社会の静態、つまり構造論と動態、つまり変動論は知識・観念のなかに解消され、人間と社会は有機体のもつ秩序へと解消される。社会の変動は社会それ自身のなかに、その変動の原因を求めなければならない。そうするとき具体的な、社会それ自体の構造という問題も提起されることになる。

次にコント哲学の主柱ともいふべき実証主義・実証精神について検討していこう。コントにおける実証主義は、当時のフランスの機械論的な自然の思考方法で、それは神学的または哲学的思考方法に対する自然科学的思考方法である。したがって実証的状态の主要な特徴として観察への

想像の不断の従属が強調される。「原因の不可解な決定の代りに『法則』即ち観察された現象の間にある不変な関係の単なる探究を行なう」こと、これがその特徴である。実証的精神はここから相対性の理論へと発展する。「われわれの実証的な探究は、本質的に『存在するもの』について、その最初の原因や最終の目的を発見することを断念して、あらゆる面において、それを組織的に評価することに帰着しなければならない。さらに重要なことは、この現象の研究が少しも絶対的なものとなることができないで……常に『相対的』なものでなければならない。この二つの面から……われわれは……あらゆる現実の存在を完全に確認する可能性を少しも保障できないことがわかる。けだし存在の大部分はおそらくわれわれが完全に把握できないものであるにちがいないからである。」⁷⁾したがって実証精神の目的は合理的予見にある。このように、彼が実証的段階にいたり観察を非常に重視すること、可能となったことは先にも述べたようにそれなりの理由があった。つまり自然科学の非常な発達であり、特に生物学における思考方法の人間社会への適応である。そしてそれは確かに封建社会に対する闘いにおいて積極的役割を果たした。しかしコントにあっては、それは同時に神学的思考方法からの区別ということで現象が本質から断絶される。本質とか原因は初めから断念されるのである。彼によれば観察にもとづかない想像は神秘主義となり、想像により補われない観察は経験論に陥る。実証精神はその両者から脱していると考えられているのである。しかし本質を神秘主義との関係のみでとらえ、現象あるいはその法則と断絶されるものとして把握する限りにおいては、それは神秘主義の尾をまだ身につけているのであり、同時にその限りで経験論に陥る必然性をもっているといわねばならない。相対的なものと絶対的なものとの間に絶対的な鉄のカーテンを置くことによってではなく、相対的なものなかに絶対的なものが、絶対的なものなかに相対的なものの要素があるという、両者の相対的関係をみることによって初めてその統一的把握がなされるであろう。⁸⁾認識不可能なる事物の本質——「物自体」を強調することには別のそれなりの意味があった。それは彼自身が身をおいていた時代背景との関係であり、ブルジョア革命後の危機意識である。コント実証主義は初めから本質・原因の追求を断念することにより、現象としてのブルジョアジーの出現とその表面的勢力のみに目をうばわれ、そのことの本質、それが必然的に、不可避にもたらすところのプロレタリアートの出現、その役割を無視することになるのである。またこのことは資本主義社会の本質・ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争に目をおおい、これらの本質を無限のかなたにおいやることなのである。

以上、コントの社会学・その変動論をみてきたわけであるが、コントが以上のような限界性・問題点をもっていたにもかかわらず、社会学が社会を全体的・包括的視点から追求するという点（もちろんコントにあっては、社会学を諸科学の帝王の位置におくことにより可能とされたのであるが）は、今日、社会学が受け継ぐべきところであると考え、コントにおいては、本質の断念されたものではあるが、社会の包括的、統一的法則なるものが存在し、それ以上進歩しては困る、秩序に守られた産業社会でストップされたものではあるが、社会の進歩の方向が、歴史が問題にされている。コント以後の彼の何らかの影響下にある社会変動論は、その「積極面」を少しづつつけず、今日では本質の不可知から法則の不可知へ、包括的・統一的社會認識から局部的・微視的動態・社会過程へ、知識の発展に従う社会の方向的進歩から全く無方向性さえもが問題になっている。しかもコントの非現実性・社会に対する有機体の類推（秩序の強調）を貫きつつ、

1) 「社会再組織に必要な科学的作業案」河出書房 5p

- 2) 〃 19p
- 3) 〃 20p
- 4) 「実証精神論」河出書房 121p
- 5) 「実証哲学講義」下, 春秋社 95p
- 6) 「実証精神論」121p
- 7) 〃 123p
- 8) 「マルクス・エンゲルス・マルクス主義」国民文庫(2) 222p

2. 高田保馬の場合

高田保馬(1883～)はジンメルに始まる形式社会学の流れをくむ、特殊社会科学としての社会学という立場に立ち、社会学は「人間結合」という社会の一面をそれ独自の研究対象とする分析科学たるべくとする。社会の本質をあくまでも結合にもとめるところから、結合社会学ともいわれるのだが、その意味するところは必ずしも一定のものではないようである。初期における結合と分離の両者を独立な無関係のものとしてとらえる傾向は、後には両者の不可分性・同一事実の表裏としてとらえられるようになり、更に後には「結合の上位」が説かれるようになる。¹⁾「吾人が社会と称するものは広義における社会現象の一なり。即ち人々の心的結合という現象そのものを指して、結合せられたる人々の集団を指すには非ず」。²⁾そして心的相互作用をその対象とする形式社会学から晩年一般社会学・哲学的社会学を提唱したジンメルに対して自らの立場を「純粹社会学」としてなお維持しつづけている。³⁾このようにして自らの固有の対象＝「有情者の結合」をもつ社会学は当然、現実社会の政治的・経済的諸問題とは全く離れたものなのであり、現実の歴史・社会現象を問題にするのもあくまでも「仮説的な法則の組織として、あくまで妥当又は関係の世界を構成する」⁴⁾ためであり、その結果それが法則化された時はすでに時空をこえた、事実的存在の性質を全く失ったものとなる。社会学はそれまでの総合社会学から「社会科学界の一平民としての社会学」となり、同時に現実の社会を遊離したところに自らの位置を求めることになったのである。そしてこのような「社会」の構成原理は「欲望の平行」であるという。欲望というのは、本能及び習慣を基礎として生じる主観的感情的状态としての衝動が、その衝動を満足させる目的の観念と結びついたところに生じるのであるが、⁵⁾欲望の平行とは、同様の対象に対して同一の態度を執る欲望が、同時に多数の人々に存在することである。社会の一切の活動はこの欲望を原動力とするのであり、「欲望は社会活動・従って社会進化の原動力なり」⁶⁾ともいわれる。この欲望の種類は発生的見地から次のように分類される。⁷⁾すなわち個体保存のための(1)経済的、(2)防衛的、(3)性欲的欲望。種族保存のための(4)血族的、(5)群居的欲望。知力・道徳・芸術・宗教等からなる(6)文化的欲望。力の欲望としての(7)支配的欲望である。

では、以上のような社会の構成原理のもとに社会変動はいかなるものとして考えられているだろうか。そもそも抽象的な「結合」を対象とする社会学が社会変動を問題とすること自体奇妙に聞こえるが、そのことについては次のように説明される。「原始より現代に至る迄の社会形態変遷の跡を迎える従来の進化論の如きは吾人之を以て社会学固有の領分に属するものと信ずる事能はず」。⁸⁾「自ら論せむとする所は飽くまでも事実の間に存する関係にあり、今説かむとする発達の傾向というものも、或社会形態の存在が他の如何なる形態の存在を誘発するかという関係に他なら」⁹⁾ないとされる。そこで次にその社会変動論についてみることにする。

高田保馬は、社会変動の究極原因は人口の増加であるとする。氏によれば観念論は第一史観、唯物論は第二史観とし、この第二史観の分析批判によって自らの立場・第三史観を確立したという。唯物史観は経済史観であり、それは生産力・氏によれば結局技術が自己運動を行ない、それ

に依じて生産関係・更に政治法律等一切の精神・文化を規定するという、しかし生産力の発達には科学の発達、つまり観念の進歩の結果であり、自己運動するものではない、それに社会の変動は社会＝結合そのものから説明されねばならず、その究極原因は人口の増加に求められるべきである、また経済が社会的諸事実を決定するのではなく、その経済自体が経済と社会に分けられる、そして社会こそ経済・政治・法律・観念諸形態を動かすものであるという。¹⁰⁾ このように人口の増加、その質量的変化が人間相互の社会関係を決定し、これが政治的・法律的諸制度を規定し、影響を与え、これらを基礎として経済が、更には意識諸形態・文化が変えられることになるという、これが第三史観あるいは社会学史観といっているものである。

社会変動の方向については、基礎社会、派生社会、全体社会の三つに分けてそれぞれ検討される。¹¹⁾ 原始社会における単一社会の段階から今日に至って、人口は甚だしく拡大しているわけだがその社会は三つの方向に分化が行なわれているという、一つは例えば仕事におけるような地位の分化、二つは享受における階層としての地位の分化、三つめは全体社会内に包括されるところの部分社会の分散である、そしてこのような分化を引き起こすものは、前提としての人口増加はあるにしても、力の欲望であるという、力の欲望とは何なのだろうか、ここでの力というのは社会的勢力であり、社会的勢力とは「服従せられる能力である」としている、またここで服従とは勢力要求の充足を意味し、能力とはその可能性が主体の意味と努力にかかわるような可能なのである、結局力の欲望とは人間の結合によって生じるところの、勢力要求を充たそうとして個人がもつ主体的な欲望ということになる、「自己の力の優越を欲する欲望」が社会の分化・異質化を押し進めたというのである、こうして分化される基礎社会は「拡大縮小の法則」により国家のような大社会はますます大きくなり、家族のような小社会はますます小さくなるという、また基礎社会は社会的錯綜＝分散によりその機能をしだいに失い、それを派生社会へと移す、地縁から目的縁への動きに応じて基礎社会の母体からの派生社会の形成が、派生社会の更なる分化と錯綜により存在と機能の無限の分化がすすむという、全体社会についてみるなら、原始時代における小さくて交流の狭い、しかし結合のきわめて親密な共同社会は、人口の拡大と共にその活動範囲を広め、社会的密度を大とするわけだが、ここに結合定量の法則が働いて、人々の間の結合がゆるみ、相互の関係が個人主義的になり、各自が自分の自由を求めることが強くなるという、つまりテニース (Ferdinand Tönnies: 1855～1936) のいうゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの働きである。¹²⁾ ところで結合定量の法則というのは一定の社会 (全体社会) 内における社会的結合の分量は、一定の時代においてはほぼ一定しているということである、なぜなら人間が本来持っている結合の傾向は身体組織そのものに制約せられており、何らかの対象を求めて発展せざるを得ないと同時に、その発動には一定の限界があるからであり、したがって各個人についてもそのなかに含まれる結合には定量があると考えざるをえないからであるといわれる。¹³⁾ こうして全体社会は共同社会から利益社会へと変化を余儀なくされるわけだが、同時にそこでは前論理的知識にかわって、理知的知識が支配的となる、近代の理化知と利益社会化は相互に制約しあい、助長して進行する同一過程の二面であり、社会・経済・観念形態の前進は果てしなき理化知の方向に進むという。

さて、ここで以上のような高田社会学、及びその変動論を検討することにする、まず社会そのものにとらえかたであるが、氏は社会の「本質」を結合と分離との関係、そして結局結合に求める、ここで当然問題になってくることは、このような社会の概念では何人も人間だけに限ったことではないということである、氏自身のべている、「社会学は有情者の結合を対象とする科学なり」、

「社会学を以て人類社会の研究のみに限定す可きものに非ず」¹⁴⁾ しかしわれわれが問題にする社会は、当然人間社会であり、動物の集団生活・群とは異質のそれなのである。この現実社会をとらえようとするなら当然、社会とは……の問題もそのようなものとして考えられねばならない。しかし高田保馬の「社会の本質」社会の位置づけはそれ自身、自らの社会学を成立せしめる基礎となるものであり、高田社会学の研究対象としての「社会」なのである。「社会生活の一切内容を離れてその形式をのみ考察するはこれ社会学の職分なり、社会科学相互の差異は対象に内容と形式の差異あるに基づく。」¹⁵⁾ それは従来の帝王科学としての総合社会学に対する反動として19世紀ドイツにおいて生じた形式社会学の特徴であった。ジンメルを中心とする当時の形式社会学は、確かにそれまでの総合社会学の欠陥・諸社会科学のよせ集めの性格・その対象の不明確さ等に対する批判として形成され、それなりの意味をもっていた。しかしジンメルにあっては特殊科学としての社会学の対象は、内容を抜き去り、具体性を欠いたところの形式、「社会化の諸形式」とされる。ここにはむしろ社会学の後退があるといえる。この傾向は当時のドイツ社会の特殊性から説明される。ドイツでは資本主義の後進性、つまりそれが独占資本主義への移行と重なり合うという点があった。19世紀と20世紀の境目にドイツ資本主義は独占的傾向をおび、巨大な資本家連合が発生した。しかしその独占資本はユンケル階級・君主制と固く結びつき、カイゼル・ドイツの侵略政策の張本人となり、両者の利益の一致は、ドイツ帝国主義にブルジョア・ユンケルの性格を与えていた。このような社会状態のなかにおいて、現代ドイツ社会学は非合理主義・反共主義の性格をもつことになる。植民地の超過利潤による一部労働者の貴族化と労働者階級の体制内組み入れという新しい事態のなかで、社会学そのものもこれまでの帝王としての地位を下り、心理的なブルジョア個人主義の立場を確立することになる。ジンメルを先頭に、本質直観によって集団・指導・服従・闘争等の純粹形式をとらえ、特に内的結合状態を社会の本質とするフェールカント (Alfred Vierkandt 1867～1953)、社会を人間間の動的な社会過程としてとらえるヴィーゼ (Leopold Wiese 1876～) 等である。これらの心理学的社会学の潮流を日本に紹介した米田庄太郎、そしてその門下高田保馬もやはり社会学におけるこの潮流のうちにあった。単なる輸入科学としてではなく、日本における独自の社会学体系を築き、大正期における日本社会学をリードした高田保馬は、しかし同時に当時の第一次大戦、ロシア革命の激動のなかで強まっていた帝国主義の基盤形成と、その必然的結果としての人民への階級的抑圧、搾取の強化、こうした情勢における河上肇等を中心とするマルクス主義に対立する社会理論として自らの立場を確立せんとしたのである。このような事情により、その個別科学としての社会学においては、理論のための理論、実践的側面を離れ、分析を通してその説明を進めようとする分析論理の方法論に基づいており、社会変動についても、その段階的な発展は拒否され、その方向が、しかもきわめて抽象的に問題とされるにすぎない。社会学の研究対象の問題は、今日なお残されているといわなければならないにしても、それを結合という抽象的な、非歴史的な、観念的次元に求めることは、社会学の非生産性と他の諸科学との分離を結果することになる。

唯物史観に対立する史観としての「第三史観」はすでに形式社会学者ジンメルが、心理学的・観念的立場からのべているものであるが、高田保馬においてはそれは人口史観という形に内容が変えられる。社会変動の究極原因を（人口増加に求める考え方はすでにデュルケーム学派にみられる。高田保馬の場合、社会の変動は結合様式の変動であるから、その限りでは確かに人口の増加は人間の結合様式をより複雑にし、変化させるということ「社会変動」を起すということがいえるかもしれない。しかしそれはあくまでも、社会を結合という抽象化された意味で規定すると

きのみ可能なのであり、それもなぜ人口あるいは人口密度の増加が、様々の異なった、ある一定の結合様式を生み出すかは何ら明らかにされない。ましてある特定時代の政治・経済・文化等をも含めた具体的全体社会の構造的変化は、人口の増加そのものによっては何ら説明しえない。人口の増加はそれ自身、一つの社会的な現象であった。一定の人口量、密度を可能ならしめたものは、そして人口の変化をひき起こした原因は、自然の諸法則と同時に、全体社会的な、とりわけ経済的条件ではなかったろうか。

また経済が社会的諸事象を決定するのではなく、社会こそ経済・政治・法律等を決定するというマルクス「批判」も、実は社会そのものとの見え方をマルクス主義のいう社会構成体とは全くちがう意味に使っているからであり、したがって社会という概念の意味づけの段階ですでにマルクス「批判」をしていたことになる。そのマルクス批判は、マルクスの理論を自分の規定する概念でもって「理解」し、「批判」することになっている。

更に人間社会の分化をひきおこすとされる力の欲望とは、自己の勢力要求なるものの優越を欲する欲望であった。しかしここでは、社会変動の原因にこの観念的・本能的な力の欲望なるものももちこまれている。唯物史観でも観念史観でもなかったはずの第三史観は実質的には観念史観と肩を並べているといわなければならない。「社会学の問題と方法」(新明博士還暦記念論文集)においては、社会の各方面のあらゆる変動、ことに前進運動を理解すべき二つの因子があるとし、一つに人口増加、他の因子に力の欲望をあげている。しかし自己の力の優越を欲するという「本能的」な、非歴史的、抽象的なものによって、それぞれの歴史的、具体的な社会の内容を説明することは、人口の増加の場合と同様不可能である。しかしまた、それは高田社会学、「純粹社会学」の特徴でもあった。力の欲望そのものが資本主義社会における激烈なる競争、倒すか倒されるか、奪うか奪われるかを必然とする資本主義社会の経済構造の反映といえるのではないであろうか。そしてそれをもって人類社会の発展原因とするところに一つの限界をみることができる。

こうみえてくるとその問題点は、社会学の取り扱うべき対象を具体性、現実性を欠いた抽象の「純粹」の世界に限定するという方法論上の欠陥が浮きぼりされてくる。それは高田社会学のもつ限界性であると同時に、形式社会学そのもののもつ限界性であると思われる。われわれは、社会の個々の現象が、それぞれバラバラに無関係に生じているのでない以上、それらを全体との関連で総合的に見ていく必要があるし、同時に具体的な生きた現実を起点として、それにもとづいた実践的な方法論を今日の社会学に課すべきであると考えている。(以下次号)

- 1) 「高田社会学」有斐閣、大道安次郎 p. 73
- 2) 「社会学原理」岩波、高田保馬 p. 5
- 3) 「社会学論集」河出書房 p. 20
- 4) 「社会学原理」岩波、高田保馬 p. 12
- 5) “ pp. 178~179
- 6) “ p. 180
- 7) “ p. 201
- 8) “ p. 1074
- 9) “ p. 1085
- 10) 「社会学」有斐閣、高田保馬 p. 177
- 11) “ p. 141 以下
- 12) 「高田社会学」有斐閣、大道安次郎 p. 139
- 13) “ p. 137
- 14) 「社会関係の研究」岩波、高田保馬 p. 430